

ヨーロッパへの新たな海の道!

大いなる可能性を秘めた北極海航路

日本と欧州を結ぶ新たな海上輸送ルートとして、「北極海航路」が注目を集めています。国土交通省では、北極海航路の利用可能性を探るべく、検討を開始しました。



北極海航路の利用で期待されるメリット

近年、地球温暖化の影響によって、北極海の氷が減少しています。今年9月には、北極海の氷の面積が観測史上最小を記録しました。氷の減少により、日本と欧州を最短距離で結ぶ「北極海航路」の可能性に注目が集まっています。

現在、日本と欧州の間を往来する貨物船は、東南アジアのマラッカ海峡、中東とアフリカの間のスエズ運河を経由する「南回り航路」を利用してきます。その距離は、横浜港からオランダのロッテルダム港まで約2万1000km。長距離であることに加え、ソマリア沖での海賊の襲撃リスクなど安全面での

課題もあります。

一方、北極海航路は、ロシアとアメリカの国境に位置するベーリング海峡を経て、北極海を横断し、欧州に至ります。南回り航路の約6割の距離となるため、輸送時間が短縮され、燃料費や温室効果ガス排出量の削減も期待されるなど、日本の物流・産業に大きなメリットをもたらす可能性があります。

ここ数年は、ロシアから中国への資源輸送など北極海航路の商業的な利用が始まっており、今後利用が拡大することも考えられます。

課題を洗い出し、対応策を検討

しかし、北極海航路の利用には課

北極海の海水分布 出典:JAXA



1980年代の9月最小時期の平均的分布。



2012年9月16日 観測史上最小分布。

題もあります。まず、現時点で航行できるのは海水が少なくなる夏期の約4カ月間だけで、年間を通じた定期運航ができません。また、ロシア沿岸を航行する際には、事前の許可や、砕氷船の先導を受けるための追加費用などが必要とされています。

そして、自然環境への影響も懸念されます。例えば、寒冷な北極海で油の流出事故が起きると、微生物による分解などの自然浄化に途方もない時間がかかると言われています。

国土交通省では、北極海航路の利用に向けた可能性を探るべく、今年8月に検討会を立ち上げました。今後、海運業界など民間企業の意見も踏まえながら、利用に向けた課題の洗い出しや、対応について検討していきます。



北極海の氷海を突き進む砕氷船に先導される貨物船。出典:北極評議会 AMSA2009レポート